

吃音の自分、受け入れて前向きに 大阪のグループ半世紀

有料記事

小若理恵 2019年9月16日14時00分



吃音の当事者が悩みを語り合う大阪吃音教室は、半世紀以上続いている＝2019年9月6日夜、大阪市天王寺区



吃音（きつおん）の人が集う大阪の自助グループが半世紀以上、地元で活動を続けている。取り組みは先進的で、学校や地域での支援が乏しく、社会で孤立するのが不自然ではなかった時代から当事者同士が悩みを語り合ってきた。一人ひとりが自身の特性を受け入れ、前向きに生きる力を取り戻す場だ。

吃音 「わ、わ、わたし」と繰り返したり、「わーわたし」と伸ばしたり、「……わたし」と言葉につまったりする症状。原因は遺伝的な要因や脳の機能障害ともいわれる。治療法は確立されていない。世界人口の1%前後にみられる。

悩むのは損、格好悪くない

8月9日夜、吃音を抱える20～70代の約20人が大阪市天王寺区の寺院に集まった。

「就職面接が怖い。あいさつの言葉がなかなか出てこず、失敗した体験を引きずってしまっ」。NPO法人「大阪スタタリングプロジェクト」（東野晃之理事長）が毎週開く大阪吃音教室。初めて参加した広島市の20代男性が口ごもりながら話した。

「面接で重要なのは、あいさつではなく自己アピール」

「はじめからどまることを恐れてもしょうがない」

「名前をうまく言えるか、あいさつできるか、そんなことで悩むのは損。言葉にまっても、格好悪くない」

周囲から励ましの声が上がると、男性の表情が緩んだ。

大阪吃音教室は1966年、吃音の当事者が立ち上げ「大阪言友会」として始まった。日本吃音臨床研究会の伊藤伸二代表（75）＝大阪府寝屋川市＝が前年の65年に、仲間と東京で立ち上げた組織の流れをくんでいる。

治す努力を一切否定

吃音への対応は、専門家の間でも見解が分かれている。治療や訓練に力を入れるところもあるが、大阪吃音教室は「治す努力を一切否定し、吃音とともに豊かに生きる」ことを掲げる。

教室では、テーマに基づく集団討議のほか、哲学や心理学、認知行動療法の講義もある。消極的な思考や思い込みを断ち切る方法を参加者に身につけてもらうのが目的だ。

東野理事長は「年月はかかるが、吃音を『恥ずかしい』『隠したい』と思っていた人も仲間の体験を自身に重ね、症状を受け入れて前向きに生きることを目指すようになる。これからも後押ししていきたい」と話している。

「もう隠そうと思わない」

長年教室に通い続け、ありのままの自分と向き合えるようになった女性がいる。今は悩める人の背中を押す。

兵庫県西宮市の会社員藤岡千恵さん（43）。3歳の時、「おとうさん」と言うのに、「おおおおお……」となった。父から「もう1回『おとうさん』と言うて」と頼まれた。「私の話し方は良くないかな」。劣等感をもった。

小学3年の時、授業で先生にあてられ、長方形の面積の公式を発表することになった。意に反して「たたたた……」と連発した。周囲の男子に笑われた。「卵」は「エッグ」と言い換えたり、返事をする前に一呼吸置いたりして吃音を隠すようになった。

ただ保育士として働き始めると、子どもへの声かけ、保護者や同僚との会話など瞬時のやりとりを迫られた。言葉に詰まる場面が出て、話すことが憂鬱（ゆううつ）になった。

22歳の時、新聞記事で見つけた教室に参加した。でも言葉に詰まる人を直視することができず、足が遠のいた。催眠療法を求めて心療内科に行くと、不安神経症と診

断された。処方薬を飲み続けたが、かえって不安や不眠の症状が重くなるばかりだった。

29歳になった。いつまで薬を飲み続けるのかと思った。「吃音を恥ずかしい、治したいと思うから苦しいのではないか。吃音がある自分を否定している限り、この苦しきからは逃れられない」。教室を再び訪ねることにした。

はじめはうまく言葉が出せない自分をさらせなかった。あるとき、「やっぱり恥ずかしいよね」という仲間の言葉が腑（ふ）に落ちた。幼なじみや親友に「吃音がある自分」を打ち明けた。「知っと思ったよ」「そのままでいいやん」。意外にも優しい反応だった。

教室で笑った男子は音を連発する現象にびっくりしただけかもしれない。バカにされたり、いじめられたりしたわけじゃなかったんだ――。教室で仲間と学ぼうち、過去の苦い記憶の見方も変わった。

10年ほど前から教室の運営委員を務める。「吃音は表面的なもの。大事なものは内面ですよ」。かつての自分のような人たちに声を掛け続ける。

今でも外出先や電話で派手に音を連発すると、「格好悪い」と思う。笑われたら少しは傷つく。それでも、もう吃音を隠そうとは思わない。「吃音があっても人との関係は壊れない。そのことに気付いたから、どんな時も自分を偽りたくないんです」

(小若理恵)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.